

青年の親準備性に関する研究 (2)

— 高校生の場合 —

井上 義朗 (東京学芸大学児童学)
深谷 和子 (")
岩田 崇 (慶応義塾大学小児科)
秋山 泰子 (")

目 的

既報「青年の親準備性に関する研究(1)―大学生の場合―」にひきつづき、今回は高校生の場合における性意識、対異性行動の現状、親意識の形成状況、育児観などを明らかにすることを企図した。

方法と対策

前回、大学生の場合に作成された調査票を高校生向きに修正し、さらに今回はマザリングのパターンなどに関する新しい項目を加えて、調査票を作成した。対象高校生は、東京都と神奈川県下の公立高校(共学で進学校)と、国立大学附属高校あわせて5校に在学する1年生から3年生、男子495名女子681名、計1176名であった。(表1)すなわち現代の高校生の中では、「中の上」層(セミエリート層とも言える)の者たちである。調査実施は、昭和57年9月から58年1月にわたった。

結 果

1) 本サンプルの高校生(中の上層)の対異性行動は、世に宣伝されているよりも、著しく貧弱であった。

1-1すなわち、「両思いの相手がいてつきあっている者」は、サンプル全体(1~3年生)では、わずか男子11.0%、女子18.7%に過ぎない。しかし、学年の上昇と共に女子で両思いの相手をもつ者は急激に上昇し、1年生から3年生にかけて、11.7%、18.3%、25.9%となる。(男子は7.5%、19.9%、14.5%)昨年の大学生のデータによれば、この割合その後も次第に増加し、大学4年生では、男子が40.5%、女子44.9%となる。(図1)

1-2高校生のSEX観は、表2の如くであって、男子の方が結婚を前提としないSEXに積極的であり、女子は全体に保守的な傾向が見出される。

1-3しかし女子のSEX観は学年の上昇とともにその後急激に変化し、男子との距離が接近して行く。すなわち「結婚するまでSEXしない」と答えた者の割合は、高1から高3にかけて、63.3%、50.5%、36.1%と激減する。(男子は同じく、27.7%、27.9%、19.6%) (図2)

1-4しかし、このようなSEX観の所有状況にもかかわらず、彼らの対異性行動は比較的貧弱で、表3に示したように、喫茶店で好ましい異性と2人だけでお茶を飲んだことが1度もない者は、男子62.6%、女子53.8%もあり、夜中にラブコールをしたことのない者も79.7%と74.0%。ひろんラブホテル経験者は僅少である。

2) 高校での家族計画の指導は、必ずしも十分に行われていず、とくに女子生徒に、その意義について疑義を抱く者が多い。

2-1サンプル全体のうち、指導を受けた者の割合は37.8%。そのうち男子は、「受けてよかった」と「無意味」とする者の割合は24.4%と7.8%で、圧倒的にその意義を認める者が多いが、女子は23.1%と20.3%と相半ばしている。これは現場での指導上の問題点を示すものと考えられよう。

3) 最近の保育所等の普及にも拘わらず、本サンプルの世代では、とくに幼少期は母親による保育が一般的なスタイルである。

3-1乳児期に母親によって育てられた者は、男子93.4%、女子88.8%と圧倒的である。保

育所経験者は0.4%と1.6%にすぎず、僅少である。

3-2 幼児期における幼稚園経験者は89.7%と87.8%で、保育所の経験者は、10%前後にすぎない。(幼稚園も保育所も行かなかった者は1.0%と0.7%)

3-3 カギッ子経験者は、男子で22.2%、女子で33.9%である。(図3) しかしその時期を見ると、表4のようになり、幼児期にカギッ子にしておく母親は、僅少である。

中学生になって、または小学生になって、子どもにある程度の自立能力が備った後で、子どもを置いて働きに出るのが、現代の働く母親の一般的な様相のように思われる。

すなわち世に思われているほど、母親たちは子育てを放棄していないと言えるであろう。

4) 自分の両親の子育てのあり方は、比較的肯定的に受けとめられている。

4-1 図4が示すように、全体の約5割は両親の子育てのあり方をほぼ踏襲しようとしており、否定的に受けとめる者は少い。しかしカギッ子経験のある者は、ない者よりも、それを肯定的に受けとめる割合が低い。とくに男子の場合その傾向が見出される。

5) (従って)将来予想される自分の結婚生活では、自分(母親)の手で育児をと考える者が圧倒的であり、とくに男子がそれを望んでいる。

5-1 図5に示したように、たとえ妻が専門的職業についていても、それを放棄して自分(妻)の手で育児をと考える者は、男子の83.3%、女子の63.5%にも達する。但し、その意識は男子の方に強い。図が示すように親にあずけての職業生活の継続を望む者が、女子には28.6%もいる。しかし男子女子とも保育所での子育ては、敬遠されている。

6) 子育ての大変さは、ほとんどの者が認識しており、父親や母親の役割は十分に評価されている。

6-1 父(母)親の役割を、「苦勞の多い大変な—だれにでもつとまるような易しい」という対語で評定させてみると、前者を選択する者は、父親の場合男子で88.9%、母親の場合女子で92.0%にも達する。

6-2 しかしカギッ子経験を持つ者と持たない者との間で、両親の評価を見てみると、母親については一様に「苦勞の多い大変な」との評価がなされているが、父親についてはカギッ子経験の無い者の父親評価の方が高い傾向を示す。

7) 両親の人生における自分たち子どもの意味を問うと、昔のように「生きがいのほとんど」と見る者は少く、負担ではないが「生きがいの一部」と見る見方が大部分である。

7-1 図6に示したように、「子どもは親の生きがいの殆んど全て」と見る者は少く、男子の場合父親について25.2%、母親について32.6%、女子の場合同じく28.3%と39.5%と少い。男子と女子では女子の方がやや子育てを生きがいと見る者が多く、また父親と母親ではむしろ母親の方に、生きがいと評価する者の割合が多い。しかし父親と母親とに対する評価の差はわずかで、おそらく昔にくらべれば、隔世の感のある数字であろう。

7-2 またカギッ子経験との関連で見ると、父親に対する評価には差がないが、母親に対しては、カギッ子経験のある者の方が、「(働らく)母親にとって子育ては生きがいであろう」と考える者の割合が多くなっている。とくに女子はそうした評価をする者の割合が多く、これまでとあわせて女子の方が人生における子育ての意味を評価する傾向を持っていると言えよう。

8) 現代の高校生においても依然として子どもの成長には両親そろっていることが必要と考えられており、子はかすがいという意識が見出される。しかし子どもがあってもなくても、離婚に対する態度は女子の方が積極的である。

8-1 図7が示すように、性格の不一致というやや具体性に欠ける条件を用いて、離婚の意志を聞いてみたところ、幼児がいる場合には、全体の約8割が離婚せずがまんすると答えている。しかし子どものない場合はこれが一挙に減少し、男子で49%、女子で30%となる。

また子どもがいてもいなくても、女子の方が結婚生活の継続には耐性のなさを示す。

9) 自分の人生における子育ての比重については、子どもが生まれても自分の生活にある程度エンジョイして行きたいとする者が多く、自分(親)

本位の生活こそ望まれていないものの、子育てに
 献身する生き方は考えられていない。

9-1 図8が示すように男子女子とも8割が
 「子どもが生まれても、ある程度自分の時間をも
 って人生をエンジョイして行きたい」と考えられ
 ており、「献身的な子育て」は「親本位の生活」
 よりも支持率が低くなっている。

結 語

既報(1)大学生の場合と同様に、現代青年層の中
 でもエリート(またはセミエリート)層における
 性意識、対異性行動は比較的温和なものであり、
 親意識の形成も比較的順調に行われていると見て
 よいだろう。現代における親準備性の形成は、こ
 れより下の層の青年たちにおいて探られるべきで
 あり、また教育が必要と考えられる。

表1 対象高校生

	総数	1年生	2年生	3年生
男子	495	172	176	147
女子	681	180	323	178
計	1.176	352	499	325

表2 高校生のSEX観

	(%)	
	男子	女子
① 結婚を前提としなくても、 好ましければSEXする。	52.0	31.3
② 婚約していればSEXしてもよい。	22.7	18.9
③ (婚約していても) 結婚するまではSEXしない。	25.3	49.8

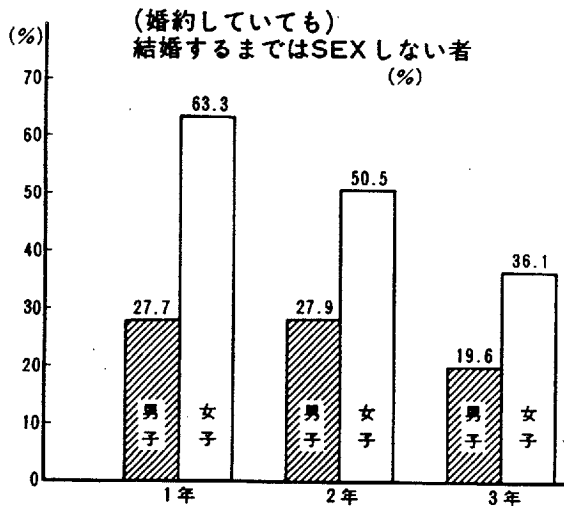


図1

表3

異性(好ましい)との接触状況
(1度もない者) (%)

	男子	女子
喫茶店で話す	62.6	53.8
プレゼント	56.5	41.1
腕をくんで歩く	75.8	72.0
夜中の長電話	79.7	74.0
同伴喫茶へ行く	97.1	97.6
泊りがけ旅行	96.7	95.9
キスする	88.3	86.0
ラブホテルへ	97.1	95.5

表4

カギツ子の経験がある
——その時期はいつか (%)

- ① 幼稚園
- ② 小学生
- ③ 中学生
- ④ 幼稚園・小学生
- ⑤ 小学生・中学生
- ⑥ 幼稚園・小学生・中学生

男子	女子
1.7	1.8
29.9	26.8
35.9	35.4
1.7	1.2
29.1	32.3
1.7	2.4

両思いの相手のいる者

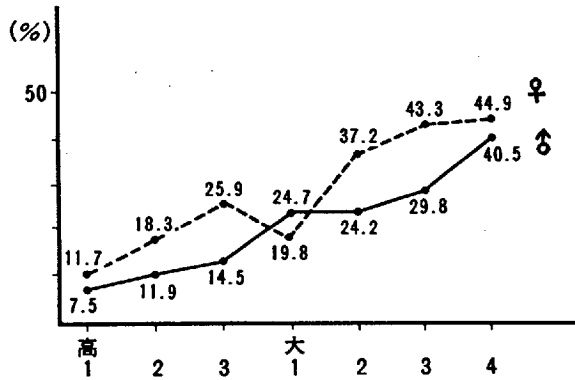


図2

カギツ子の経験の有無

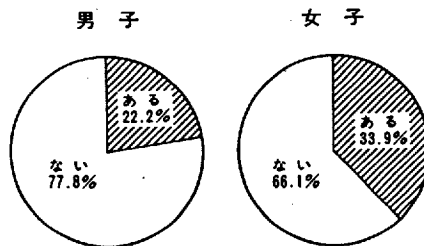


図3

将来、自分の両親が自分を育ててくれた
ように自分の子どもを育てたいと思うか

	とても そう思う	わりと そう思う	半分 半分	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
男子	14.0	39.2	22.2	17.7	7.1 (%)
女子	16.2	35.1	25.8	15.6	7.2

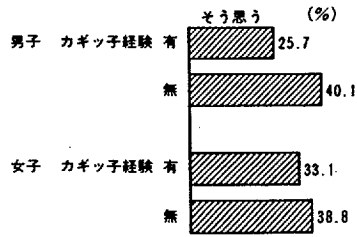


図 4

職業か子育てか(妻が専門職の場合)

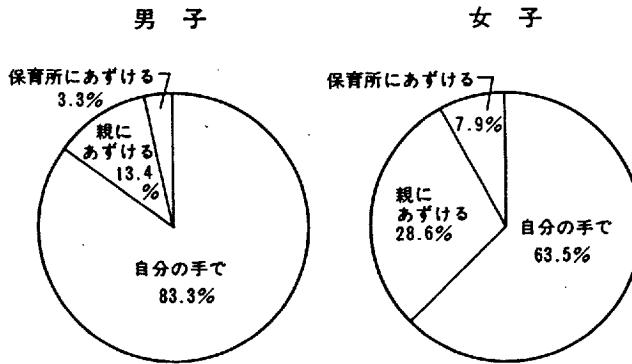
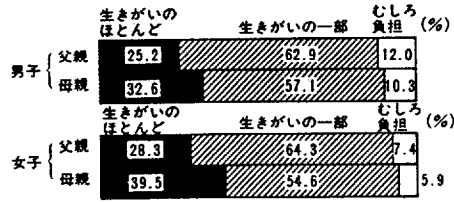


図 5

父親や母親にとって子どもは生きがいか



母親の人生における子どもの意味

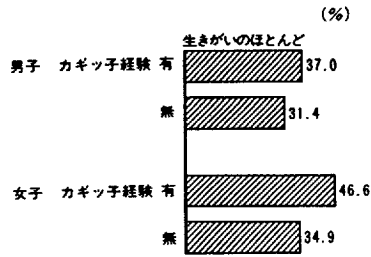


図 6

性格の不一致で離婚するか

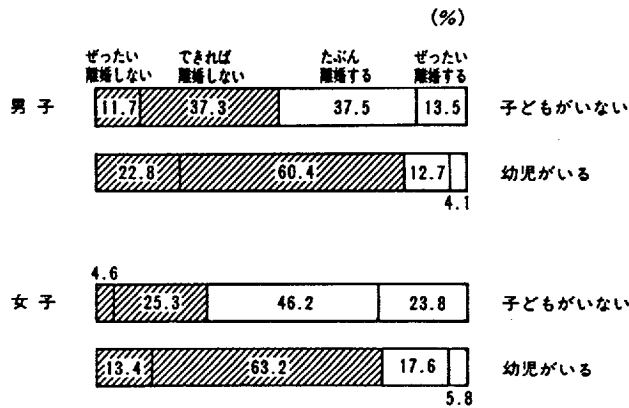


図 7

子育てか自分の生活か

男子

女子

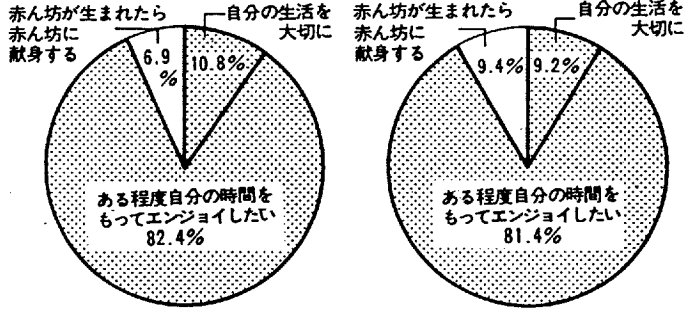
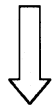
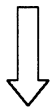


図 8



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



結語

既報(1)大学生の場合と同様に、現代青年層の中でもエリート(またはセミエリート)層における性意識、対異性行動は比較的温和なものであり、親意識の形成も比較的順調に行われていると見てよいだろう。現代における親準備性の形成は、これより下の層の青年たちにおいて探られるべきであり、また教育が必要と考えられる。